

# 宮沢賢治の仏教世界

——「雨ニモマケズ」考——

菅 原 諭 貴

## はじめに

近年宮沢賢治生誕百年を迎え、賢治ブームが続いているが、その大方は詩人・童話作家という文学者としての賢治像であろう。

しかし、賢治三十七年の生涯を俯瞰すれば、彼は農学・地質学・化学など科学的分野や、作詩・作曲・チェロ演奏・水彩画といった芸術的方面にも造詣が深かったことが知られるのであり、現在賢治の人間像について各分野から研究が試みられている。

ところで、賢治の作品の根底には宗教的素養、特に仏教思想・仏教信仰というものが深く根ざしており、甚だ重要

宮沢賢治の仏教世界（菅原）

な位置を有するのであるが、現今における賢治研究に関する論究は、創作過程・作品論といった文学的志向に集中し、宗教的世界への言及は未だ充分とは言えぬのが現況であるう。

ただこのような状態を憂慮してか、平成四年二月には、大島宏之氏の編集により、『宮沢賢治の宗教世界』と題する論文集が刊行され、<sup>①</sup>ようやく宗教的視座から賢治研究の進展が試みられるに至った。

先ず最初に、賢治の求道者・宗教者としての生涯を鑑みるに、宮沢家は浄土真宗大谷派の門徒であり、父政次郎を中心とした家庭には、朝夕勤行が絶えない宗教的雰囲気が漂っていたのであり、賢治の伯母ヤギは、親鸞の『正信偈』

や蓮如の『白骨の御文章』を子守唄替わりに、三歳の賢治に聞かせていたことも伝えられる。

父政次郎は熱心な仏教信者であり、青年期より有志と花巻仏教会を創設し、賢治十歳の時には、暁烏敏を講師とした夏期仏教講習会に賢治は父と共に参加し侍童をも務めている。

また、賢治十五歳の八月には、同じく夏期講習会にて、西本願寺派の学僧・島地大等の法話を聴聞し、十八歳頃には、島地編『漢和対照妙法蓮華経』を誦することにより、『法華経』に感動し、次第にその信仰を深め、父に改宗を迫ったり、町内を寒修行に歩いたりもしている。

二十四歳の時には、田中智学が創立した法華系在家教団である国柱会に入会し、智学への信仰に傾倒する一方、以後、高知尾智輝の勧めにより、法華文学の創作に向かっている。

宗教的立場・求道者としての視点に立脚して賢治を捉えるならば、彼は天性の鋭敏な感受性と表現力で、『法華経』の信仰を中心とした宗教と、哲学・自然科学をも取り込んで、当時の貧しき労多き農民の生活に目を向け、その救済

に自らの一生を捧げ尽くしたと言える。

本稿は、先に日本宗教学会にて発表した拙稿<sup>②</sup>を再考補完するものであり、賢治の著作の中から最も著名な「雨ニモマケズ」の詩を取り上げ、そこに見出される仏教的世界、及び賢治の宗教者・求道者としての生きざまを探ってみた<sup>③</sup>。

この詩は、賢治の死後、彼の弟清六氏により偶然発見された手帳の中に収められていたものであり、賢治が昭和六年九月に発熱病臥して間もない、十一月三日に病床で書かれたもので、賢治特有の飄々たる筆致で表記されている。

また、この詩は賢治の他の作品群とは全く異なり、公表を意図したものではないとされるが、広く世に知られるに至ったのは、『現代日本詩人選集』や日本少年国民文庫の一冊、『人類の進歩に尽くした人々』などに掲載され、また諸外国にも翻訳・紹介されたことにもよるが、<sup>③</sup>更には、学校教育のテキストの一部として活用されたことも大きな要因であろう。

ただ今日、この詩に対する評価は賛否相異なる見解が存するのであり、谷川徹三氏は、東京女子大学で行われた講

演で次のように絶賛している。

この詩を私は、明治以来の日本人の作ったあらゆる詩の中で、最高の詩であると思つています。もつと美しい詩、あるいはもつと深い詩というものはあるかもしれない。しかし、その精神の高さにおいて、これに比べうる詩を私は知らないであります。この詩が今日の時代にもつほとんど測り知ることのできぬ大きな意味——これは結局宮沢賢治という詩人が今日の時代にもつている意味であります<sup>(4)</sup>、それを私はここでお話いたしたいのであります。

これに対して中村稔氏は、『現代詩』の中で、

「雨ニモマケズ」は僕にとつて、宮沢賢治のあらゆる著作の中でもつとも、とるにたらぬ作品のひとつであるうと思われ。『雨ニモマケズ』はつづいて「風ニモマケズ」と対比されることによつて、ともに具体的な現実感をうしなっている。「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」の詩句が、スローガンのように流行することは、この詩句の観念的な欠陥に因つているので、この詩句がすぐれているためではない。そして、この詩句の意

宮沢賢治の仏教世界（菅原）

味するところは、つぎの「雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ」と同じく、「丈夫ナカラダ」の修飾句であるのだが、つまり雨にも風にも雪にも夏の暑さにもまけぬ強靱な肉体をもちたいということなのだが、語勢がつよすぎるために「雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ」の次句をかえつて弱くひびかせ、逆にこの「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」を浮き上がらせている。しかも、「雪」、「夏ノ暑サ」が対比され、さらにこれが「雨」、「風」と対比されることにより、いずれも言葉が内包している意味を打消しあつている。この対偶法とよばれる修辭法がこれほどおびただしくつかわれている作品もすくないであらう<sup>(5)</sup>。

と、対蹠的に対偶的・修辭法といつた詩作上の面から過小評価している。

このことは、以後「雨ニモマケズ」論争として展開していくのであり、分銅惇作氏の「宮沢賢治における宗教意識——法華経信仰と『春と修羅』の世界」の冒頭においても、両者の論争の核心について検尋されている<sup>(6)</sup>。

ともあれ、両者の対極的相違は、思想的（哲学・宗教）

立場と詩的（文学・修辞）立場、つまり内面的思索の深まりに重きを置くか、あるいは詩的美しさ、形式論等に価値を求めるかといった両者の視点の異質さに、問題の所在の一端が存するかと思われる。

このことに関しては、賢治の活躍した時代とは遙かに隔たるが、宗教者・哲人・詩人等の評価を得る、日本曹洞宗の宗祖道元禅師の著作からも窺うことができよう。

禅師は、『正法眼蔵』をはじめとして、思想的・規範的著述を多数撰述されているが、一方、和歌・漢詩（偈頌）といった、いわゆるの詩文をも多く残している。特に『永平広録』の中には、四二七首余もの偈頌が収められており、その詩作法は必ずしも漢詩一般の用法に順うものではなく、時には規範に甚だ違背するものも認められるのである。<sup>(1)</sup>

このことは、『正法眼蔵』撰述において、二訂三訂を重ね彫心鏤骨された禅師の推敲の姿勢から推すれば、甚だ齟齬するかに思われる。

しかし、禅師にとって最大の関心事は、仏陀の教法をいかに学人に説示するかであり、それ故、冷暖自知の体験の世界を偈頌に託するならば、定型化された表現ではおさま

りきらなくなることも生じるのであり、時には漢詩一般の慣例を打破することも要求されたのである。

従って、文学的表現の美しさや形式を追求するならば、確かに美的センスを欠く謗りを免れ得ないが、宗教的・内面的思索の表詮においては、むしろ賢治の詩は崇高なる光彩を発するのであり、そこに却って自在なる真理・真実が顕現し得るのではないかと思われる。

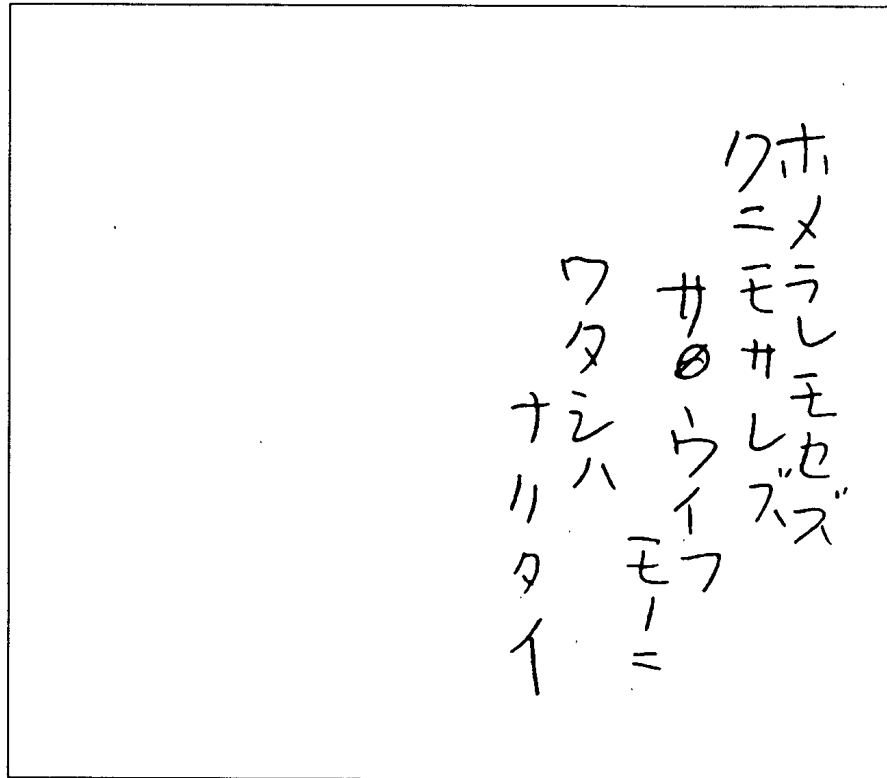
以下本論では、「雨ニモマケズ」の詩を適宜各段に分類して検討したい。

雨ニモマケズ  
 風ニモマケズ  
 雪ニモ夏ノ日者サコ  
 モマケズ  
 又夫ナカラダラ  
 モケ  
 谷ハナク  
 決ミテ夏ラス  
 イツモミヅカニワラツテ  
 一日ニ玄米四合ト  
 味字ト少シノ  
 野サキツタハ

アラユルユトヲ  
 ズブンヲカニミヨウコ  
 入レスニ  
 ソミテ  
 ワスレスヨクノウカリ  
 野原ノ松ノ林ノサ陰ノ  
 山ノ屋ニテ  
 東ニ病ニ氣ノコトモ  
 アレバ  
 行ツテ看病エテ  
 カリ

西ニツカレタ母アハ  
 行ツテソノ  
 稲ノ束ヲ  
 カ目ス  
 南ニ  
 死ニサウナレバ  
 行ツテ  
 コハカラナクテモ  
 イー  
 トイヒ  
 行ツテ

三ニケンクワヤ  
 ソエヌラカ  
 マラナイカラ  
 ヤメロトイヒ  
 ヒドリノトキハ  
 ナエタヲナガシ  
 ガムガノナツハ  
 オロカマアルキ  
 エンナエ  
 テク  
 ボ  
 ヌバト  
 足



(一) 雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

先ず冒頭において、「雨」「風」「雪」「夏ノ暑サ」の語を取りあげているが、具体的には「風雨」「風雪」「猛暑」など大自然の厳しき様相を代表せしめているのであり、それは仏陀の「苦諦」の教えにみられる人生において遭遇する様々な苦悩を意味するのである。そして、そのような苦難に負けぬ逞しい体（身）・精神力（心）を持って対処すべきことが示されており、そこには仏教の「忍辱」「精進」「堅固」「不退転」などの教えが見出される。

(二) 慾ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラツテキル

「慾ハナク」は、『仏遺教経』に示される「八大人覚」に

代表される「少欲知足」の貪りなき生活であり、「決シテ瞋ラズ」には、貪・瞋・痴の三毒の「瞋恚」に対する戒めと「忍辱」の教えが示されている。そして、「イツモシヅカニワラツテキル」の箇所は、同様に「八大人覺」に存する「寂靜」「禪定」としての喧騒な世界を遠離した、静寂・安穩の境地と、「和顔施」にみられる慈愛に満ちた容姿と温和な生き方が説かれている。

(三) 一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

ここでは、賢治自身も実践していた玄米菜食を中心とした「少欲知足」的な食生活と、「十二頭陀」の第五番の実践徳目として置かれている「節量食」の教えが該当するものと思われる。

(四) アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

この箇所は、大乘菩薩の行願である「菩提薩埵四摂法」にみられる、「利行」「利他」「自未得度先度他」の精神が端的に示されているのであり、「空」「無我」「無執着」の思想、更には禅の「只管」「無所得・無所悟」の生き方とも相通ずるものがあるう。

(五) ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

先ず「ヨクミキキシワカリ」は、正しい人生観・世界観に関する智慧と深遠な思索を説く「八正道」中の「正見」「正思惟」の教えが示され、「ソシテワスレズ」には、日常生活において正しき意識・注意を失わず、常に「無常」「苦」「無我」などを憶念すべきことを説く、「八大人覺」の「不忘念」や「八正道」中の「正念」の思想がみられる。

(六) 野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニキテ



ここでは、手帳の冒頭に記されているように、昭和六年九月二十日東京での発病時に、「マタ北上峡野ノ松林ニ朽チ埋レンコトヲオモヒシモ」とメモしている箇所と関連するものであり、賢治自身大都會の囂しき世界から解き放たれた永遠の安らぎの地を、寒村花巻に求めていたことが知られる。そこには「小サナ萱ヅキノ小屋」に象徴されるように、雨露を凌ぐに足る「少欲知足」「寂靜」を基軸とした頭陀の生き方が指摘できよう。

(七) 東ニ病氣ノコドモアレバ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稻ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

先ず「東ニ病氣ノコドモアレバ、行ッテ看病シテヤリ」

宮沢賢治の仏教世界（菅原）

では、「苦諦」の中の「病苦」を取りあげ、看病という「四摂法」「六波羅蜜」を中心とした布施の実践行が示されている。看病者は病人を看護する意であるが、『俱舍論』では仏道修行者の異名として用いられ、また『梵網經』には、「若し仏子見一切疾病人、常応供養如<sup>(1)</sup>佛無<sup>(2)</sup>異、八福田中、看病福田、第一福田」とあり、病人を看病することが如来・仏を供養することに異ならず、功德無量であることが説かれている。

次に「西ニツカレタ母アレバ、行ッテソノ稻ノ束ヲ負ヒ」では、その背景には、賢治が過ごした花巻や盛岡近郊の田園、更には冷災害などに苦しむ東北一帯の農村の生活があったであろう。

賢治が生きぬいた明治から昭和初期にかけては、国内外では戦争は絶えず、地震・津波の発生、不作に喘ぐ農村地帯は、地主と小作人との貧富の差は益々悪化し、凶作に苦しむ農民の中には、娘を身売りする者もあつたとい<sup>(12)</sup>う。

このような状況下にあつて賢治は、「ツカレタ母」の語で当時の貧しき農民の生活を描写しているのであり、そこには、勤労・奉仕を中心とした布施行が認められる。

次いで「南ニ死ニサウナ人アレバ、行ツテコハガラナクテモイ、トイヒ」には、「苦諦」の「死苦」を取りあげている。死に際しては、未知への恐怖・不安が生じ、現世への愛著も起こる。そこで仏教では、衆生の畏怖・苦悩を滅除する「施無畏」「無畏施」を説くのである。「施無畏」は法・施・財施と並ぶ三施の一つであり、賢治自身も死を直視した人々に対し、様々な方途で「施無畏」を実践したものである。

更に「北ニケンクワヤソショウガアレバ、ツマラナイカラヤメロトイヒ」では、仏道修行における無益な議論・論争を否定する「八大人覺」中の「不戲論」の教えが示され、また闘争の場に臨んでは、自ら勇氣をもって和解・融和せしめる、正しい努力・勇氣としての「正精進」「和合尊」などの生き方もみられよう。

(八) ヒドリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

賢治は、冷災害に苦悩する農民の救済という希望に燃え、

盛岡高等農林学校に入学し、その後、地質調査・品質改良・肥料設計など科学的研究を土台とした農業指導を行っている<sup>(13)</sup>。

しかし、岩手県はもともと冷涼で山地が多く、稲作には不利な環境であり、加えて冷災害の頻発地でもあった。

この一段には、賢治自身が直面した、過酷な自然の条件と常襲する冷災害に喘ぎ疲弊する零細な農民たちの生活が映し出されている。

従つて、賢治にとつて時には、近代的農業技術をもつてしても、人間は大自然の前にはなす術もなかったのであり、そのような時は、仏・菩薩の大慈大悲に縋り、共に悲しみ、涙するほかなかったのである。

このことは、文政十一年冬、突然、越後地方を襲った地震の際、良寛が述べた「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」の慈訓と一脈通ずるものがある<sup>(14)</sup>。

ともあれ、その徹底した慈悲行において、はじめて人は真に慰め癒されるのであり、ここには「四摂法」の一つである「同事」の教えが見出されるのである。

(九) ミンナニデクノボートヨバレ<sup>(15)</sup>

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ

ここには、賢治が生涯その信仰の中心に置いていた『法華経』にみられる、常不軽菩薩の生き方が示されている。<sup>(16)</sup>

『法華経』の常不軽菩薩品には、

如レ此経ニ歴多年ニ常被ニ罵詈。不レ生ニ瞋恚ニ常作ニ是言。

汝當ニ作佛。説ニ是語ニ時。衆人或以ニ杖木瓦石ニ而打ニ擲之。避走遠住。猶高聲唱言。我不ニ敢輕ニ於汝等。汝等

皆當ニ作佛。以ニ其常作ニ是語ニ故。増上慢比丘比丘尼優

婆塞優婆夷。號レ之爲ニ常不軽<sup>(17)</sup>。

とあり、どんな罵言や迫害にも怯むことなく、「我、敢えて汝等を軽しめず。汝等は皆まさに仏となるべきが故に」と言つて、出合うありとあらゆる人々に礼拝を行じた真摯な姿こそ、正に賢治が目ざされた世界ではなかつたかと思う。

また賢治は、十七歳の頃、盛岡市の報恩寺僧堂の尾崎文

宮沢賢治の仏教世界（菅原）

英について参禅していたのであり、自らの頭を剃るほどの熱心さであったことが伝えられている。<sup>(18)</sup> 賢治の短歌の中には、

いまはいざ

僧堂に入らん

あかつきの、般若心経、

夜の普門品

という参禅時代を詠んだ一首があり、朝の勤行では『般若心経』を読み、夜の晩課では『法華経』の「普門品」が読誦されていたことが知られる。

この報恩寺での参禅が、賢治にとって特に想い出深きものであったことは、晩年に記された「雨ニモマケズ手帳」の次のメモからも知られる。<sup>(20)</sup>

木魚いまや、急にして

み経はも三請に入る

報恩寺訂正

しめやかに木魚とゞろき

衆　いま誦し出づる

寿量品第十六や

清らなる――

さらばいざ　座を解きて跪し

わが不会と会とのかなたに

み仏のとはにゐますを

双手しておろがみ聴かん

賢治は十八歳の頃『法華経』の「寿量品」を読んで身が震える感動を覚えた<sup>(21)</sup>とされるが、この報恩寺での参禅もその機縁の一端であつたともいえよう。

更に推するならば、曹洞宗で特に日夜読誦される經典に『宝鏡三昧』がある。これは中国唐代の禅僧、洞山良价が詠唱した歌曲であるが、この經典の末尾には、「潜行密用、如<sup>(22)</sup>愚如<sup>(22)</sup>魯、但能相統、名<sup>(22)</sup>主中主」という一節がある。ここでは修行の要諦について、仏道は決して他に誇るものではなく、恰も愚人の如く装い人知れず潜かに綿密に行じられるところに現成する旨が示されている。

従つて、賢治の手帳にも報恩寺時代の想い出について触れられている箇所が見ることからすれば、おそらく当時読誦していた『宝鏡三昧』の教えも、この詩の結語に何らかの影響を及ぼしていたものと思われる。

このことは、賢治自身の生き方とも深く関わるのであり、賢治が生前刊行したものは、心象スケッチ『春と修羅』と、童話集『注文の多い料理店』の二冊のみで、世間では何の反響もなく無名の作家として世を去つた。ところが、死後、全集が出版され、草野心平・谷川徹三・高村光太郎三氏等の尽力により全国的に知られるようになった<sup>(23)</sup>。

ある意味で賢治は、文学者としての優れた素養を持ちながら、現実には、常に「愚の如く魯の如し」的生き方をされたものと思われる。「雨ニモマケズ手帳」にも「高知尾師ノ獎メニヨリ、法華文学ノ創作、名ヲアラハサズ、報ヲウケズ、貢高ノ心ヲ離レ<sup>(24)</sup>」とあり、そのことを如実に伝えている。

そして結語には、「サウイフモノニ、ワタシハナリタイ」とあるが、「サウイフモノ」こそ正しく仏・菩薩であり、賢治が目ざした世界でもあつたらう。

しかし、求道者としての賢治は、常に花巻を中心とした貧しき農民にその目を注がれていたのであり、死の前日、肥料設計の相談に来た農民に対し、家人の心配を余所に、夜遅くまで懇切な指導を行っていたのである。従って、賢治自身が既に、仏・菩薩の道を歩み、三十七年の生涯が仏・菩薩そのものであったともいえよう。

以上、「雨ニモマケズ」の詩について、その作品の背景に内在する仏教的世界を中心に検尋してきたが、この詩は、「四諦八正道」「八大人覺」「菩提薩埵四摂法」「六波羅蜜」など、仏教の基本的思想が凝縮され、互いに関連し合い、詩的調和をもって成立している。そして、その根底には、賢治の遺言に、

国訳妙法蓮華經を一千部おつくり下さい。表紙は朱色、校正は北向氏、お経の終りの頁には『私の生涯の仕事はこの経をあなたのお手もとに届け、そして其中にある仏意に触れて、あなたが無上道に入られますことを。』<sup>(25)</sup>ということを書いて知己の方々にあげて下さい。

とあるように、『法華經』思想が流れているのであり、大乘菩薩の慈悲・利他の生き方ではないかと思う。

宮沢賢治の仏教世界（菅原）

「雨ニモマケズ」の詩は、賢治にとって発表の意図はなかったとされるが、それは病床の中で病苦・死苦との凄まじい苦闘・葛藤の中で生まれたものであり、発見・公表された奇しき機縁から推すれば、仏・菩薩が賢治をして書写せしめたという教法的性格も見出されよう。

更に加うれば、この詩には仏教語・専門語が一切用いられず、平易な言語で表現されている。正に万人に普く開かれた慈訓であり、時宜を得た現代的聖典の価値を有するものとして再評価すべきものかと思う。

賢治研究・賢治ブームが盛んであるが、ただ単にブームで終わらせることなく、今こそ、賢治の思想・生き方を現代に問い、二十一世紀に伝えていかねばならぬと思う。

#### 注

- (1) 大島宏之『宮沢賢治の宗教世界』（北辰堂、一九九二年二月）。
- (2) 第五八回学術大会で「宮沢賢治の仏教的世界——「雨ニモマケズ」を中心として——」と題して発表。
- (3) 小倉豊文『宮沢賢治「雨ニモマケズ手帳」研究』（筑摩書房、一九九六年五月）一三九頁参照。

宮沢賢治の仏教世界 (菅原)

- (4) 谷川徹三『雨ニモマケズ』(講談社学術文庫、一九七九年五月)一〇頁。昭和一九年九月二〇日の講演記録。
- (5) 中村稔『宮沢賢治』(筑摩叢書、一九七二年四月)一九三頁。
- (6) 分銅惇作「宮沢賢治において宗教意識——法華経信仰と『春と修羅』の世界」(『宮沢賢治の宗教世界』所収)六四二—六五一頁。
- (7) 拙稿「『永平広録』卷十所収の「偈頌」について」(『禅研究』第二七号、一九九九年三月)参照。
- (8) 仏教は本来「身心一如」の立場に立つのであり、ここでは詩的表現なるが故に、心は略されているとみるべきである。
- (9) 「雨ニモマケズ手帳」五頁・六頁には、「病血熱すと雖も、斯の如きの悪念を仮にも再びなすこと勿れ。斯の如きの瞋恚先づ身を敗り人を壊り、順次に増長して遂に絶するなからん。それ瞋恚の来る処、多くは名利の故なり。」とあり、瞋恚の起因について記されている。
- (10) 大正蔵二九、一三三下。
- (11) 同右書二四、一〇〇五下。
- (12) 上田哲・関山房丘・大矢邦宣・池野正樹『図説宮沢賢治』(河出書房新社、一九九六年三月)八五頁。
- (13) 同右書、一九—二〇頁。
- (14) 久馬慧忠『良寛入門三千大千世界の仏法』(象山社、一九九一年十月)六五—六九頁参照。
- (15) 「雨ニモマケズ手帳」には「土偶坊ワレワレ(ハ)カウイフモノニナリタイ」の語がある。
- (16) 「雨ニモマケズ手帳」には「あるひは瓦石さてはまた刀杖もつて追れども見よその四衆(へのなかにして)に具はれる仏性なべて拝をなす不軽菩薩」とある。
- (17) 大正蔵九、五〇下—五一上。
- (18) 丹治昭義『宗教詩人宮沢賢治』(中公新書、一九九六年一〇月)一五〇—一五一頁。また、杉尾玄有氏も、賢治と曹洞禅との関わりについて注目している(『道元禅師と「洞源和尚」——宮沢賢治の、知られざる曹洞禅の開眼——』『宗学研究』第三四号、一九九二年三月)。
- (19) 『宮沢賢治全集』3(ちくま文庫)九七—九八頁。
- (20) 同右書10、七一頁。
- (21) 宮沢清六「兄賢治の生涯」(『宮沢賢治の宗教世界』所収)八頁。
- (22) 大正蔵四七、五一五中。
- (23) 龍門寺文蔵『「雨ニモマケズ」の根本思想』(大蔵出版、一九九一年八月)二七頁。
- (24) 『宮沢賢治全集』10、七三頁。
- (25) 宮沢清六「兄賢治の生涯」一八一—一九頁。